

曳縄釣漁業の視察

水産業改良普及員 金城 喜彦 宏

1. 目的

表層廻遊魚であるマグロ、カジキ、カツオ、サワラ等は、黒潮の影響する沿岸海域に濃密な分布が見られるといわれている。特に本県では島嶼間を黒潮の源流部に沿い、恵まれた漁場に位置しながら、曳縄釣漁業は3トン未満の小型漁船によって時期的に日帰り操業が営まれ、小規模な経営状態である。

今回、全国でも曳縄釣漁業の盛んである和歌山県に、先進地視察を行う機会を得たので、曳縄釣を主体にした漁具、漁法並びに漁獲物の鮮度保持について、研修を受けたのでその概要を報告します。

2. 場所・期間

和歌山県すさみ漁協

昭和52年9月12日～17日

3. 参加者

渡嘉敷漁協：玉城信行、金城喜彦、赤嶺良雄、与那嶺直之、小嶺隆良、

水産課 技師（水産業改良普及員）金城宏

4. 視察の概要

すさみ漁協は、ヨコワ（黒マグロの幼魚で5キロ以下）、カツオなどの曳縄釣漁業が主体をなし、漁船数は366隻、そのうち3トン以上は267隻で、51年度の漁協受託取扱高は1,307トン、688百万円となり、魚種の70～80%はヨコワ、カツオ、カジキ、サワラで占めている。

曳縄釣漁業者の年間平均水揚げは400～600万円となっており、すさみ地区にとって重要な漁業種類となっている。

しかし、当地域でも漁場は、年ごと、季節ごとの変動が激しく、漁獲生産の安定と向上には常に努力され、最近では、魚群の探索能力を高めるために、電気水温計などを装備し、漁場の拡大に伴い、魚群との遭遇率を高めるために、近代化装備を進め、同一漁船に比べ、全国的に「紀州の曳縄船」として知られている。

5. 漁場

近年沿岸にそって廻遊していたヨコワ、カツオ群が年々沖合へ移行しつつあるため、5トン前後の漁船でも30～100マイルの沖合へ出漁するようになった。漁期は1月～9月上旬は紀州沖で行なわれ、30～40マイル沖での操業は日帰り、70～100マイル沖合では帰港が容易でないため、「海錨で沖泊り」して2日操業が行なわれる。

10月頃になるとヨコワが北上するのでそれを追って出漁するのが通例である。9月中旬には諸準備に入り、10月～12月末にかけて船団を組み太平洋沿岸にそって北上し、北海道近海まで出漁する漁船、また、別船団は瀬戸内海を通過して対馬近海にまで出漁している。まさに「ヨコワ」に取

りつかれた曳縄釣漁業の厳しい一面を知ることができた。集団での長期操業等については本県ではなかなか見られないことであり、今後学ぶところが大きい。

6. 漁 具 類

魚体、風波、魚群の水深等によって曳縄漁具も「上曳き」、「下曳き」といって使い分けられている。ヨコワ、カツオの場合は両曳きを併用している。

本県での曳縄漁具には「ヒコウキ」といったトバセ、或は素曳で、操業は1人乗りで2～3本を使用、1本に3～4個の擬餌をつけ、浮上魚群を主に「上曳き」で漁獲される。以下、和歌山県で実績を揚げている漁具、漁法について述べ、参考としたい。

和歌山県 高野町 高野漁業協同組合

高野町 高野漁業協同組合 高野町 高野漁業協同組合
高野町 高野漁業協同組合 高野町 高野漁業協同組合

高野町 高野漁業協同組合 高野町 高野漁業協同組合
高野町 高野漁業協同組合 高野町 高野漁業協同組合

和歌山県 高野町 高野漁業協同組合 高野町 高野漁業協同組合
高野町 高野漁業協同組合 高野町 高野漁業協同組合

高野町 高野漁業協同組合 高野町 高野漁業協同組合
高野町 高野漁業協同組合 高野町 高野漁業協同組合

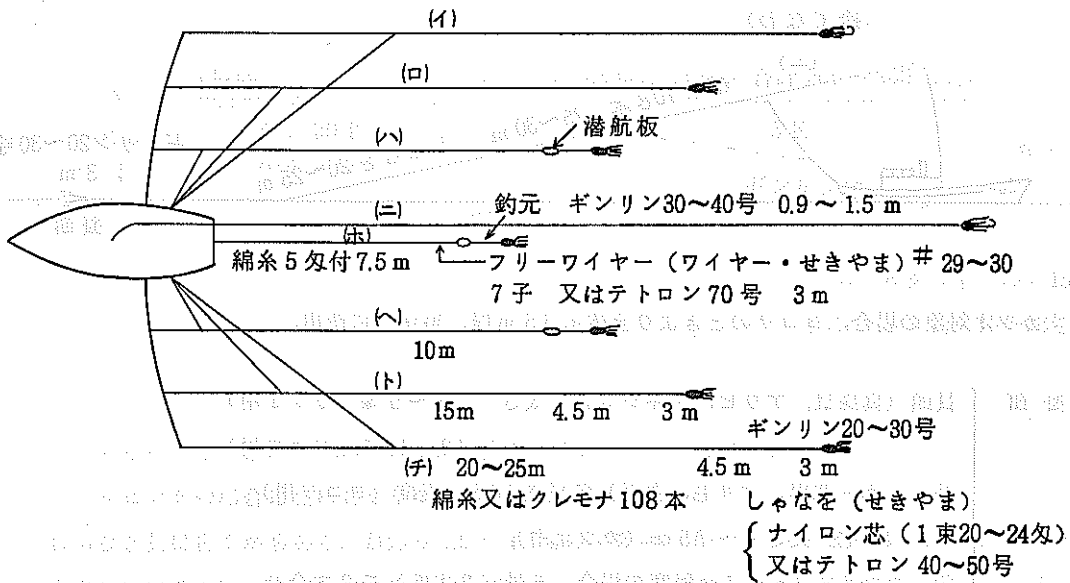
1.

ワイ

ヨコワ、カツオ曳釣

1. 下曳き（潜航板使用）

魚体 1.5 ~ 3 kg で風波があまり強くない時用いる。（上曳きと併用）

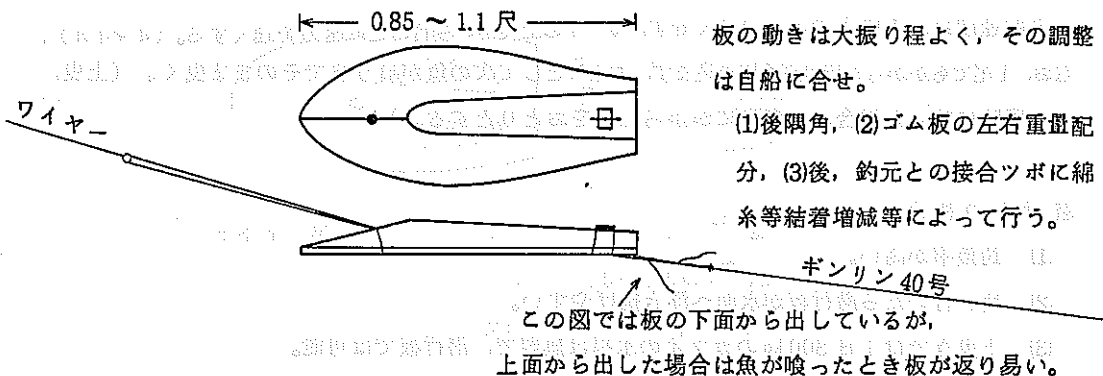


擬餌 { ホロ（真珠貝）太さ 8~9% 潜航板の後につけるホロはなるべく小さい程
毛 白毛、長さ 6~7.5 cm （太さ8%程度）よく、毛は白の多い方がよ
釣 2本爪 5~6号 い。

上記の他、ビニール製イカ、タコ型等の擬餌も使用。

潜航板 材料 日本桐

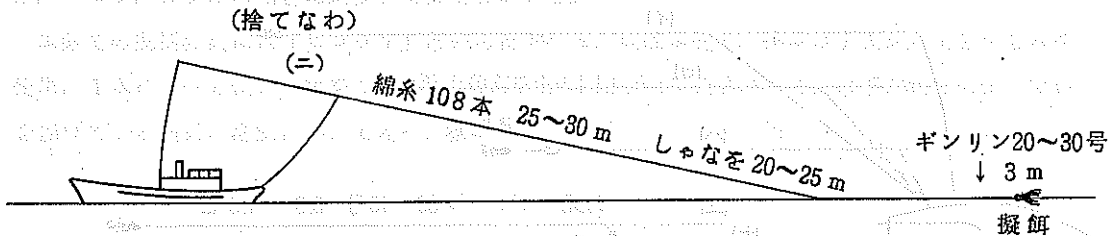
大きさ (大) 1.1尺, (中) 1尺, (小) 0.85尺の3種を普通用いる。



2. 上曳き

ヨコワは4kg以上になると上曳きか、シャ曳きの方がよい。

上図の(イ)、(ロ)、(ニ)、(ト)、(チ)が上曳。



カツオ対象の場合、ヨコワのときより全体に4.5m程、短か目に使用。

- 擬餌
- 貝頭 (真珠貝, アワビ, メキシコ貝) 太さ 7.5~9% (カツオ用)
 - 〃 12~15% (ヨコワ用)
 - 毛 (赤-芯黒, プリ毛, 白毛) 各長さ 10.5cm程度 (ヨコワ用)
 - (白毛) 長さ 6~7.5cm (カツオ用)
 - 釣 カツオ, 1.5~2kg程度の場合 6号 (2本爪) を2本合せ
 - 3kg以上の場合は4号釣を2本合せにする。

ヨコワ, 2本爪 5~6号, カツオと異り2本合せにする必要がない。

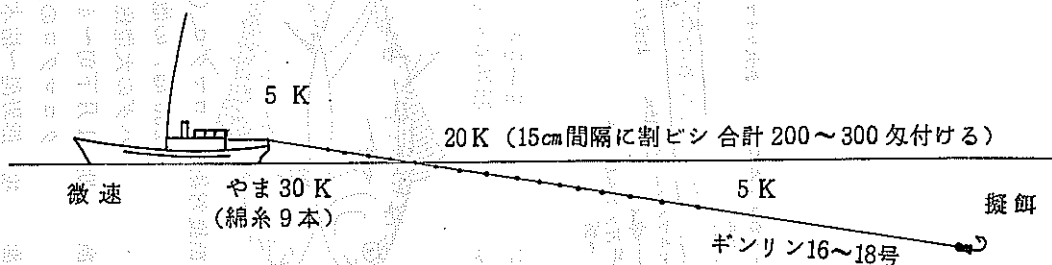
魚がシラス, アミ等を喰っている時, 又は, 凧の場合は小型の貝類, サンマ, イカ, ムロ等を喰っている時, 又は風波の強い時は大型を使う。

曳航速度は, 下曳きでは余り速くせず, カツオの上曳きの場合は逆に速力を速くする。(4マイル), なお, 1尾でもかかった時は直ぐ取り込まず, おとりとして次の魚が喰うまでそのまま曳く。(上曳, 下曳同時に喰った場合, 上曳きにかかった魚をおとりとする。)

潜行板の利点

- (1) 釣獲率が高い。
- (2) 喰い付いたら潜行板が水面へ浮き揚げやすい。
- (3) 上曳きでは1日800kgのカツオの水揚げは無理で, 潜行板では可能。

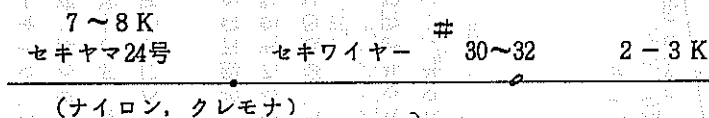
マグロ類，小形魚しゃびき釣



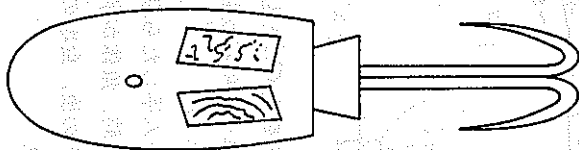
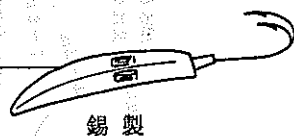
ビニールタコ型 (赤) 15号
釣針，1本釣 16~18号

- キハダの場合はしゃびいた時，真直ぐ水平に動くものがよい。
- ビンタの場合は底にもぐりこまかく動くものがよい。

しゃびき具は古くからあり，目廻り 1.5~15 kg のマグロ，メバチ，キハダの小型魚に適している。上曳で魚場を巡回，魚が上曳漁具に喰ってから，この漁法で操業する。船速は速い程良い。しゃびき具は普通 2 具用意し，まず 1 具に魚を喰わせ，それをオトリにして次の漁具で操業し，前のオトリの魚が死んだら現在の漁具に喰っている魚をオトリとし，前の魚を取り込んで，その漁具でオトリが死ぬまで操業し，これを繰返し操業する。



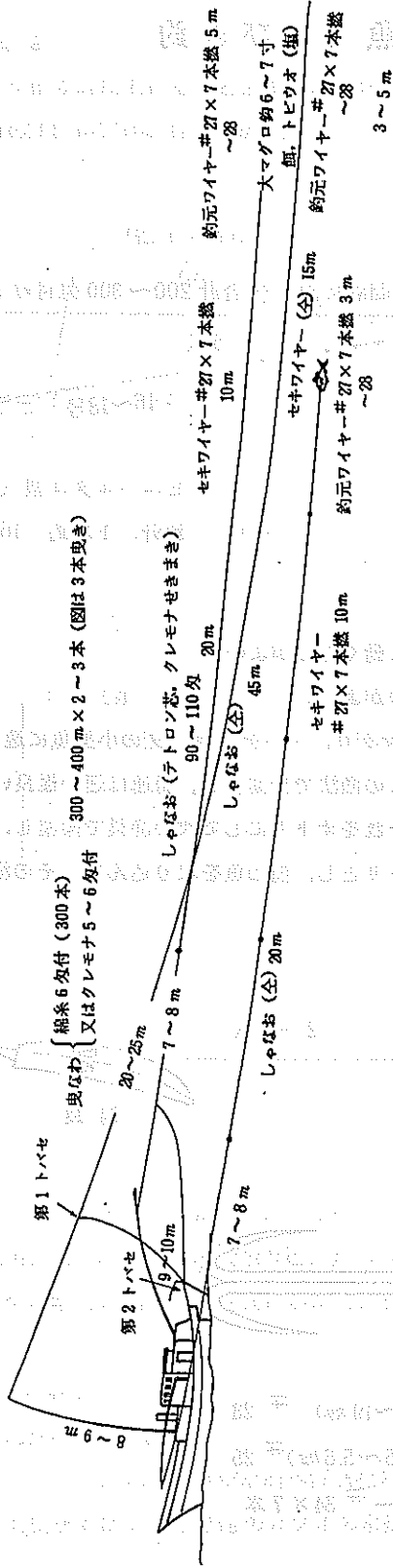
(ナイロン，クレモナ)



ワイヤー単線

キハダ (11~19 kg) # 23
ヨコワ (4.5~5.6 kg) # 25
又はワイヤー # 34×7本

クロマダゴロ曳釣



餌について

サンマ、イカ等を曳くこともあるがトビウオ（ハマトビウオ……フルセン（地方名））1尾100匁（375g）前後のものが最も良い。トビウオも生餌の方がよいが、普通は塩蔵したものを使う。

◎トビウオ保存方法

トビウオを入手したら腹を切開せず、原型のまま塩水の中に2時間程漬ける。塩水の濃度はトビウオを入れた時、魚体が半分浮上する位にする。塩水につけて2時間すれば、魚体は完全に固定するから、その後、食塩の中に入れて、満期になるまで保存する。

◎餌の装着方法

釣元ワイヤーをトビウオの肛門から通して口から出し、肛門側のワイヤー端で釣鉤を結着し、更に体内にワイヤーを引き、鉤を入れ込む。鉤の半分以上が体内にかけ、釣鉤の先は若干体外（下）に出る。そして釣鉤のクキを脊骨に縫い結ぶ。（胸ビレはたたんだまま）餌が曳行中、回転しないように、又ずれないように、ワイヤーと魚の口を縛る。

サンマ使用のときはトビウオとほぼ全様であるが、釣鉤は体の側面に結着（釣先を下）脊骨に縫い付ける。



漁獲対象 クロマダゴロ（日廻り140〜

200匁）の他、メバチ、キ

ハダの大型魚

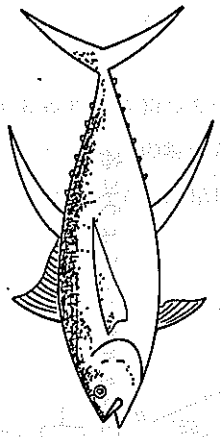
漁 期 1月下旬〜4月中旬

クロマダゴロの盛期 3月

漁 場 熊野灘〜枯木灘

ける。

キハダ擬餌曳釣



しゃなお (テトロン芯, クレモナせき, 50~60匁付)

8 m 20~23 m 10 m 3~5 m

セキワイヤー 釣元ワイヤー

29~30×7本撚 単線 #22~23

曳なわ 綿糸又はクレモナ 4~4.5匁 400 m

5 m

しゃなお 45 m

セキワイヤー 15 m

釣元ワイヤー 3~5 m

第2トバセ

しゃなお 20~23 m

8 m

10 m 3~5 m

セキワイヤー

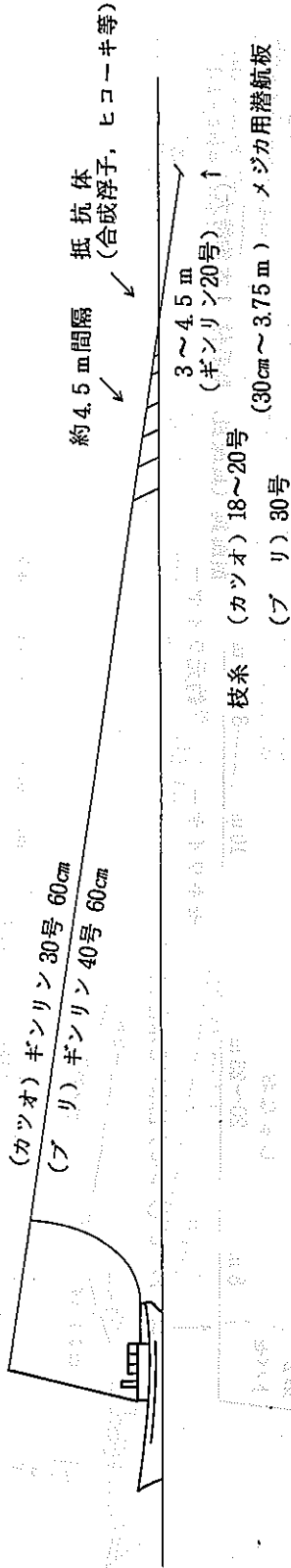
擬餌鉤 (真珠貝, 烏毛付 1本鉤特大)

釣元ワイヤー

第1トバセ (クレモナ10本×8本合せ)

カツオ、ブリ、曳釣

(トバセ)



擬餌 カツオ用ケンケンとビニール・タコ (25号) を交互に5~7本

この仕掛は昭和39年頃、串本曳釣漁船が三重県大王崎方面に出漁中、現地の漁船から導入したもので、通常の曳なわで喰いの悪い時、特に効果があるといわれる。

なお、最近は一一般にも普及され始めた。

要は抵抗体及び潜行板によって幹糸を出来るだけ張り、抵抗体前約4.5mおきに付けた枝の擬餌が丁度水面をたたくように各枝系の長さを調節し、魚がかかったらおとりとして全ての枝にかからせるようにするものである。

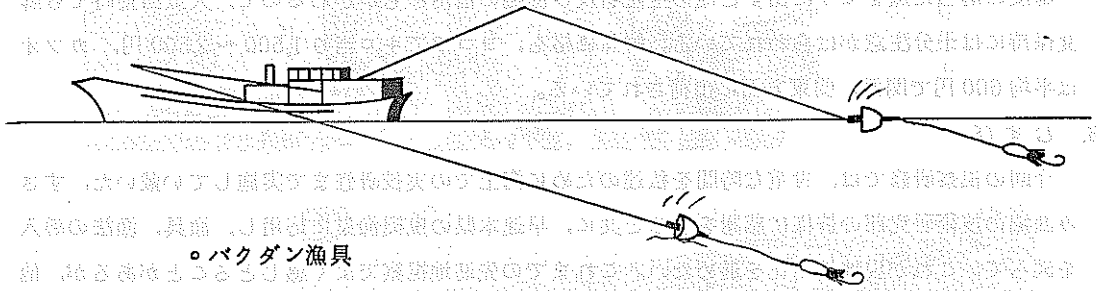


バクダン釣

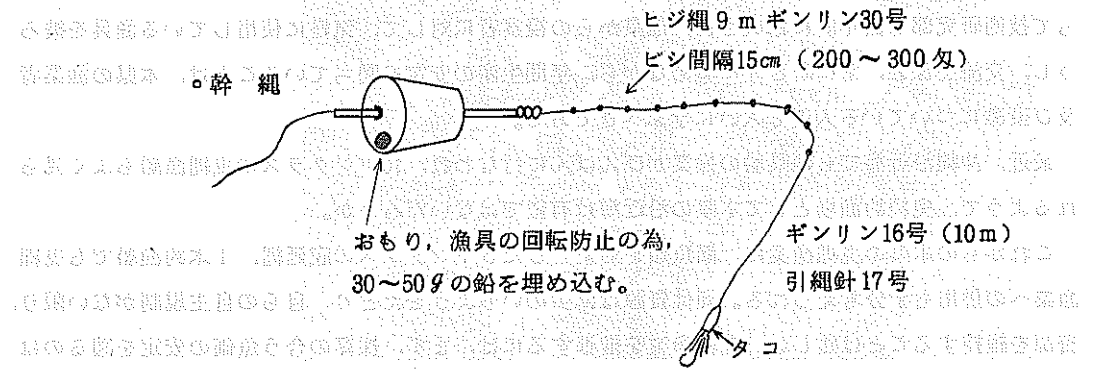
(帆柱釣) 船の舷から

この漁具は、すさみ地区に新しく導入された漁具で、トバセの改良漁具である。最近一般に普及され始め、カツオ、マグロ等の喰いが悪い時効果がある。

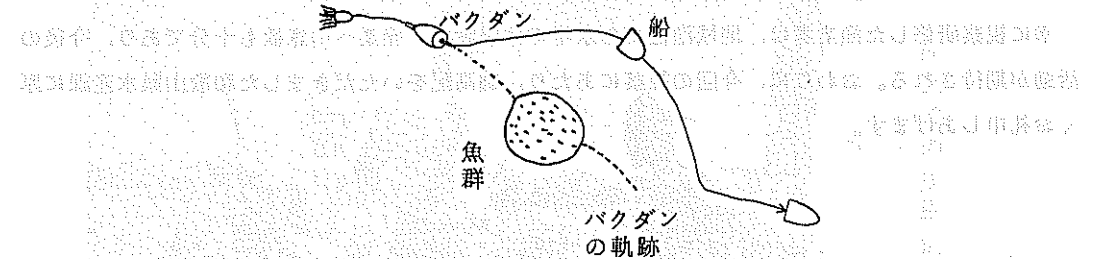
普通の浮子を二つにわって、簡単に出来る漁具ですぐにでも導入可能な漁具である。



○バクダン漁具



○操業方法



7. 魚の取り扱い（鮮度保持）

魚体に血痕を残したまま水氷に入れると、血焼けして鮮度、外観を悪くする。それを防ぐために予め用意した2個の桶に海水を入れ、魚体を海面から取り込む時点で、頭を叩き、1つの桶に入れ血、汚物をださせる。同時に他の桶で水洗いを丁寧に洗い血抜してケース（直径70センチ）にマットレス（スポンジ）を敷いて魚体を並べ、水氷用魚倉に入れる。水氷漬では普通10時間以上たつと、魚の目が淡白色に変ることがあるので、これを防ぐには水氷された海水の10分の1の真水を入れ、変色の防止を行い、なお、保蔵中に鮮度が低下したものは、これを取り除きセリ市場に出荷する。

鮮度の落ちた魚をセリに出すと他の生産者及び漁協の信用にもかかわるので、大量漁獲時でも鮮度保持には十分注意がはらわれている。鮮魚価格も、ヨコワでキロ当り1,500～2,500円、カツオは平均600円で関西、関東方面に出荷されている。

8. むすび

今回の視察研修では、貴重な時間を私達のために海上での実技研修まで実施していただき、すさみ漁協の技術研究部の皆様に感謝をすると共に、早速本県の曳縄漁業に応用し、漁具、漁法の導入を図って、これが現地適用化を進めたい。これまでの先進地視察でよく感じとることがあるが、他県では、組合意識が高まり、系統化が進められるなかで、すさみ漁協では、沿岸漁業者によって技術研究部も数年前に結成され、他県からの視察者に対して、気軽に使用している漁具を披ろうし、交流を深め、常に研さんに努めながら、年間生産の安定を図っていることは、本県の漁業者及び役職についている人達も大いに学ぶべきである。

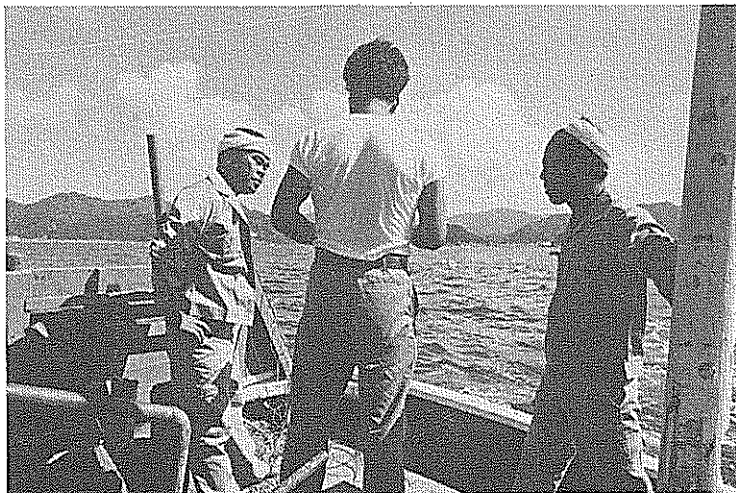
最近、沖縄沿近海でも他県船の操業がひんばんに行なわれ、10トンクラスの曳縄漁船もよく見られるようで、曳縄釣漁場として本県の沿近海は有望ではないだろうか。

これからの本県の曳縄漁業は、瀬魚類を対象とした5トンクラスの底延縄、1本釣漁船でも曳縄漁業への併用も十分考えられる。瀬付資源は減少のいちようをたどり、自らの自主規制がない限り、資源を維持することは難しい。曳縄漁業を推進するには、まず、採算の合う魚価の安定を図るのは云うまでもないが、それには魚の取扱いに気をくばり、鮮度をいかに保持するか、お互いに研究する必要がある。

幸に視察研修した漁業者は、地域漁協での永年の体験者で、操業への意欲も十分であり、今後の活動が期待される。おわりに、今回の視察にあたり、御高配をいただきました和歌山県水産課に厚くお礼申し上げます。



すさみ漁港背景に研修員と
和歌山県大岡水産普及員



海上での曳縄釣実地研修